

『高群逸枝の夢』

丹野さきら 著

(藤原書店 2009年)

高 島 有理子

本書は、藤原書店が主催する第三回河上肇賞奨励賞受賞作品である「真珠採りの詩、高群逸枝の夢」に加筆修正のうえ、まとめられたものである。

ある年数を生きた人間が「夢」という言葉を使うとき、光射す甘美な意味だけを付したりはしないだろう。消えてなくなりそうな危うさや不可能さが漂ってこそ、さらにそれを越えていこうという不屈が生まれてこそ、「夢」という言葉が鼓動しはじめるのだと思う。実は私はこれまで高群逸枝という人を知らなかった。それでもこうして紙面をいただいたのは、書名に「夢」という文字を見て惹きつけられたからだ。著者は「あとがき」で次のようなメッセージを読者に送る。

高群の思想世界には、人が個として生まれ個として生きることへの祝福が満ち、個として思考する者が求める自由への讃歌が響いている。この讃歌の旋律を聴きとって何とか形にしたいという思いから、わたしは本書をまとめた。

本書が、読者のみなさんと高群との新たな出会いの場となることを、願っている。(本書229頁)

読み始めてすぐに、本書がきわめて学術性の高い論文であるとわかり、率直に言ってたじろ

いだ。本当は一定の知識を備えた人が開くべき本なのだろう。それでも私は、本書に出会ったことを幸運に思う。見捨てられたと感じることなく読み進めることができたのは、私のような読み手が迷子にならないように、本書の射程全体をよく見渡せるように、著者が細やかに配慮して筆をすすめていることによるだろう。また、著者が引く文献は幅広く、洞察は深い。やはり前提知識なくして本書全体を深く理解することはできないだろうと思う。そこまで行き着くには、読者（私）が努力すべきであると痛感した。しかし、そのような思いを抱きながらもいつしか高群逸枝という人を身近に感じるようになっていった。さらに、高群自身の著書や彼女にまつわる議論を知りたいと思うようになり、ついにこの本の再読を誓うようになったのは、高群思想を解き明かしたいという著者の熱情がひしひしと伝わるからでもある。私のように高群に「初めて出会う」読者には、巻末の膨大な参考文献と丁寧な注が、読解の道標となるだろう。

本書は刺激的に始まる。「高群思想の全貌が明かされるのは、歴史学というくびきから解き放たれたときだろう」(7頁)。

冒頭で、高群逸枝が、「詩人、女性解放思想家、アナーキスト、ナショナリスト、歴史学者」(8頁)といういくつかの顔をもつことを紹介

し、これまでの高群研究が概括される。そして「高群思想の精髓は、汲みつくされてなどいない」(11頁)として、著者が本書で試みようとしたことが示される。それは「〈歴史〉批判者としての高群像に息吹を与えるということ」(11頁)だ。ここで用いられる〈歴史〉概念とは、「近代の歴史概念を特徴づける、過去と未来という二方向へと無限に続いていく均質な時間の流れを前提とする思考枠組み」(11頁)を指す。高群自身は歴史学者として認められることを望んでおり、その点において近年の高群研究は「高群の意に沿う」(11頁)ものではあるが、著者はここで「高群の真髓は歴史学的発想の基盤を揺るがす力にある」(11頁)と指摘する。なぜなら、「生殖によって人類は消滅する」という高群のテーゼの理解は、『『無限に続く人類』を否定する〈歴史〉批判として読み起こしてはじめて、その理論的含意を汲みだすことができる」(14頁)からだ。

「個としての生」を求める高群は、「無限に続く人類」を否定する。そして、人の生誕という事実と、人類という種の存続とは無関係であるとして、「個」としての生の誕生に讃歌を贈ることと、生殖による人類の消滅をテーゼとして掲げることに間に矛盾はないと説く。この筋道はおおまかに把握できたが、一方で、わかるようでわからない、という戸惑いも覚えた。私は少子化を憂えて子どもを産んだのではないが、子どもが生まれたことそのものは望外の喜びであった。つまり人類の再生産に貢献している(したい)とは少しも思わなかったが、「個としての生」そのものの誕生はすばらしい出来事であったという経験をふまえれば、わかるような気がする。一方、生殖を経てしか生誕しない(現代の「生殖」についての議論は横におくとして)というのは揺るぎない事実であるが、生殖から生誕へとという流れをどのようにとらえれば

よいのか、という点が気になったのだ。この疑問を解消するには、高群の「時間意識」を知り、「消滅」や「生殖」という言葉に高群がどのような意味をもたせていたのかということを受けとめなければならないだろう。たとえば「第一章 時間意識」で、著者はこう述べる。

〈歴史〉批判者である高群の母系制構想では、父-子-孫-…と連綿と続く世代継承ラインが直線的時間を表象する父系原理は存在しない。〈歴史〉上に投錨せず浮遊している母系制世界は、歴史学的な年代をもたないユートピアなのである。(45頁)

また高群は、古代も〈歴史〉上に位置づけるのではなく、「太古の海に発した生命体をも同じように、高群は、過ぎ去ったこととしてではなく現在の相のもとでイメージしていた」(147頁)という。ほかにも高群の時間意識についてはさまざまな観点から考察されており興味深い。さらに、「第三章 恋愛論」において、「消滅」という言葉につきまとう負のイメージを払拭する理論が高群のなかにあったことがわかる。「生殖」との関連については、「恋愛と生殖は相伴って、恋愛の目的であるところの一体化(=消滅)へ向けて進んでいく。子孫はその目的(=消滅)のための手段である」(152頁)ということを高群恋愛論の整理として述べている。著者の微細な分析を懸命に追ううちに、私の疑問はゆっくりと消えていった。

高群が使う言葉を今の私たちが用いる言葉で性急に解釈しないことが、本書を真に解説していくためのスタートラインであるのだろう。また、そのように読まなければ、高群の「夢」に触れることも叶わないのだろう。

読後、芳しく凜として情熱たぎる著者の文体が、本書の主題をより際立たせているという強

『高群逸枝の夢』

い印象が残ったことを、最後に記しておきたい。